学びの時間 18

今月は、応用言語学の

小田眞幸 研究室

【文学部比較文化学科】

玉川大学で開講中の各研究室を毎月交代でリポートします。今月は、文学部の小田眞幸研究室。社会に流布する言葉の影響力をテーマに研究を進めています。

[研究室memo]

比較文化学科3、4年生対象の「比較文化セミナー」。地域文化の理解、国際交流、英語教職コースの3領域からなるカリキュラムを実践する比較文化学科。小田ゼミでは、言語学の研究成果を用いて、社会で起きる諸問題を解決する力を育成する

[評価方法]

プレゼンテーション、および12月にゼミ論提出
（卒業研究は選択制）

言葉から社会の問題を見つめ協働学習で解決を図る

応用言語学の対象は言葉そのものではなく、言葉を取り巻く社会です。例えば「外国語教育」と言ったとき、日本人のほとんどは英語教育だけをイメージします。そこには何らかの社会構造が影響しているはずで、そのメカニズムを研究して課題解決を図るのも応用言語学の一例です。

ゼミは、三年生一〇人、四年生一〇人の混合クラスで運営しています。基本方針として、三年次の早いうちに研究テーマを決めさせますが、自分が興味を持っていて、言葉に関係するものであれば何でもテーマになります。ビール好きが高じて、欧州と日本でビール広告の言葉はどう違うのかをテーマにしたゼミ生もいますし、「英語教育なんていらない」から始まって、日本人の英語に対する意識をテーマにしたゼミ生もいます。

私のほうからはテーマに関連した英文の最新文献を各ゼミ生に渡して、五月と六月にグループ・プレゼンを、七月と秋学期に個人プレゼンを行わせています。それによって、ゼミ生の間で、誰は広告表現の専門、誰は英語支配の専門といったように、テーマごとの専門領域ができあがってくるんです。すると、人のプレゼンに対して自分の専門領域から激しく批評することもあれば、お互いに参考になりそうな文献を教え合うといった風土が自ずとでき上がってきます。

私がよく言うのは、二〇人が二回ずつ個人プレゼンをすれば、ゼミ全体で四〇本分の文献のリソースが蓄積されるんだと。一人ひとりの自由研究を協働学習で行うのが、うちのゼミの特徴ではないかと思っています。

ゼミを運営しているのは基本的に学生です。プレゼンする海外の最新文献は私が探しますが、授業中は基本的に教室の後ろで聞いているだけ。これを経て、三年生は英語文献の中から自分に必要な情報だけを抜き取る技術を身につけ、テーマを最終確定させていきます。

今年度は、うちのゼミから文学研究科の修士課程に進んだ三名の研究発表が、国際会議で続けて採択されるという快挙がありました。最初は学会での発表など他人事と思っていたようですが、一人が国際会議にデビューした途端、ほかの修士生にも火がついたのでしょうね。これも協働学習の成果だと思います。

これからも玉川の伝統である自由研究の精神を尊重しながら、互いの研究成果を共有する協働学習を軸としたゼミ経営を行っていきたいと思います。

おだ・まさき
玉川大学文学部外国語学科卒業後、1985年にセントマイケルズ大学大学院修士課程修了。90年にジョージタウン大学大学院博士課程を修了（Ph.D.）。同年より玉川大学文学部専任講師に就任。助教授を経て05年より教授

小田研究室に関する 3つのキーワード

☑ 協働学習

「ゼミは自由研究の場であると同時に、協働学習の場でもある」と語る小田教授。正課の時間以外にも、「教員採用試験対策」と「卒業研究対策」をテーマに、学生が自主的にグループ学習を行う通称「裏ゼミ」がある。ゼミの運営方法に関する話し合いも基本的に学生主導で行われている。

☑ 修士2年生の活躍

小田ゼミ卒業生であり、現在文学研究科英語教育専攻修士課程2年の鹿取彩奈さん、川原美菜子さん、才藤達朗さんの研究発表が、今年度に大小8つの国際会議で採択。文系では非常に珍しいことで、小田教授は「仲間同士で批評し合える環境が、彼らをここまで伸ばした」と語る。

☑ Facebookの活用

院生に限らず卒業生とも縦のつながりが強いのが小田ゼミの特徴。現役生と卒業生をつなぐツールとしてFacebookが活用され、現在は135人が登録。卒業生から就職に関するアドバイスなどが送られるほか、小田教授によって歴代卒論テーマなども掲載されている。

“ネイティブ・スピーカー”を偏重する社会風潮を分析

竹内直輝さん
比較文化学科４年

研究テーマは、「英語学習とネイティブ・スピーカーの有効性について」です。一般に、英語教育は日本人の先生よりネイティブ・スピーカーから教わったほうが良いと思われています。その背景にある日本固有の社会構造や、そもそもの“ネイティブ・スピーカー”という言葉に含まれる欧米偏重のイメージなどについて調べています。

小田先生の授業は１年次にIntensive Englishを受講して以来、取れるものはすべて受講しています。授業以外でも親身に接してくださる先生で、人間として本当に尊敬しています。

小田ゼミでは、ほかのゼミ生がプレゼンした内容や論文について、全員で共有しています。そのため、テーマは違っても一緒に研究を進めている実感がありますね。ときに議論が活発になりすぎることもありますが、それは自分が調べた研究内容に全員が裏付けを持っているからだと思います。

今年度は私がゼミ長を務めましたが、小田ゼミの良さと伝統は下級生にも引き継いでいきたいです。

取材・文／志水邦朗（本誌）